



「第二次日本経穴委員会」便り

～第8回 各国が譲れなかった15穴～

第二次日本経穴委員会作業部会委員 さかぐちしゅんじ 坂口俊二

今回は、昨年12月の第8回と本年1月に開催された第9回経穴委員会の内容をあわせて報告する。

この2回の委員会では、昨年10月に京都で開催された「WHO第3回経穴部位国際標準化に関する非公式会議」（以下、WHO京都会議）で日本、中国、韓国間で検討したが、各国に持ち帰って部位を再度検討することとなった、いわゆる保留穴15穴の日本案作りが目的となった。そのうち、第8回会議では、肘髎、髀關、衝門、天柱、勞宮、中衝、長強、水溝の8穴（『医道の日本』1月号ニュース欄参照）、第9回会議では、頷厭、頰車、飛揚、湧泉、環跳、膝關、曲泉の7穴が検討された。いずれも古典の解釈、寸度の根拠、解剖学的用語の表記方法などについて1穴ずつ地道に検討作業は進められた。

会議は、東京の大塚にある日本鍼灸会館4階の図書閲覧室で10時30分から始まった。決して広いとはいえない部屋を会議用にレイアウトし、プロジェクター、スクリーンを設定して始まる。17時までという限られた時間のなかでその日の目標をクリアしていかなければならないため、一穴にかかる時間はそれ程とれない。しかし、事前に日本で検討し、それをWHO京都会議にかけ、3か国で議論しても結論の出なかった経穴ばかりである。当然、その時の検討課

題を一から再確認なので、1時間で1穴の結論が出ないことも珍しくない。経穴の部位・取穴には各国の歴史の変遷もあり、なかなか譲歩することができない経穴もあるからである。

第9回会議で検討した経穴から例を挙げると、午前の約2時間を使って結論が持ち越された経穴がある。それは頷厭である。中国・韓国案は、「頭維と曲鬢を結ぶ曲線上を4等分し、上1/4の点」に対し、日本案は「頭維と懸釐を結ぶ直線上を3等分し、上1/3の点」である。中国・韓国案とは基準穴と寸度、髮際との位置関係において相違している。しかし、日本案の基準としている懸釐は、WHO京都会議において事前に定めた基準穴には入っておらず、また古典に遡っても同様である。中国・韓国案は経絡走行が円弧状であり、髮際から内に入った取穴を主張しており、双方の意見の食い違いと日本案の根拠を強固にできないことが結論を導けなかったポイントとなった。この時点でタイムアップ、継続審議が必要となった。また、各国の歴史の変遷を感じたのが環跳であり、その論点は大腿骨大転子の前方か後方かという点であった。日本では江戸時代から前方説で取穴しているが、中国側は一貫して後方説を主張している。日本説の根拠は明らかなことから、中国の後方説を確認した上で、最終的な部位を決

定することとした。また、湧泉では足長が足底から足指根までか、それとも足指尖までかが計測を含めて検討課題に挙がっていたが、『標準経穴学』(医歯薬出版)に実測値があり、それを根拠に足指尖から足底全長の1/3の陥凹部が、足指を曲げて足底で最も陥凹するところとした。『標準経穴学』に記載された詳細な実測結果が日本案を推し進める根拠となった。

頬車も検討に時間を要したものの1つであった。昨年のWHO京都会議では、各国とも下顎骨から内に入ることによって一致していたが、それが1寸なのか、8分なのかなどが決まらず保留となった。日本案では最終的に寸度は具体的に表記せず、「下顎骨の前上方」とし、さらにその部は「咬筋後縁の陥凹部」にあたる解剖学的部位を具体的に示すことで一致した。取穴法としてはさらに、「開口時に咬筋後縁の最も陥凹するところ」とより具体的に示す案でまとまった。寸度にこだわる中国、韓国がどのような反応を示すだろうか。古典の記載をどう表記にかすかという点で検討を要したのが膝関と曲泉であった。古典では膝関は「犢鼻下2寸」という表記が多い。これは犢鼻から床面に向かって下方という意味であるが、これは背臥位での取り方であり、さらに犢鼻が基準穴になっていないことから、犢鼻からの表記はせず、基準穴である陰陵泉を基準にすることとした。ただ、部位・取穴で最も大事なのが解剖学的なランドマークであるから、「陰陵泉の後方1寸で、胫骨内側顆の下縁」として案がまとまった。曲泉では古典の表記「在膝内輔骨下大筋上小筋下陷中屈膝而得之」中の大筋と小筋がどの筋肉を指すかが議論の焦点となった。膝を深く屈曲し、膝関節横紋の内端(膝内側関節裂隙の高さ)にあたるのは縫工筋腱と薄筋腱であり、中国・韓国

が主張する半腱・半膜様筋腱の間というのはかなりかけ離れていると考えられる。

最後に、これからの作業は、5月に韓国で開催予定の「WHO第4回経穴部位国際標準化に関する非公式会議」に向けて、2月に3日間の集中検討会議、いわゆる合宿を東京で行い、WHO京都会議で部位の再検討となった保留穴15穴の最終確認と、部位の表現を再検討することとなった検討穴29穴の議論に入る。一穴の検討に約1時間を要することもある。各経穴の意味、歴史的変遷を知れば知るほど、この作業の重大性を痛感する。

1月10日付の朝日新聞朝刊一面で『ツボの位置 日中韓で差』、『鍼灸ツボ日中韓ズレ』という見出しが踊った。新聞社側が意図的に、ツボ(の位置)というのは絶対的定点という認識が強く、それが各国で違う、これはどういうことだという患者への不安を一部あおるような表現が使われていたことは残念であった。しかし、また別の見方をすれば、補完・代替医療の急速な普及が世界的に広がっていることを示唆するものでもある。同新聞の夕刊では、その後、漢方薬についての研究成果などが連載されていることからもうかがえる。当事者(鍼灸師)からの本記事に対するレスポンスは現在まで大きいものではないが、世間全体に与えた影響はかなり大きいものであった。同記事でコメントをしている委員には連日、テレビや雑誌からの取材、ラジオ出演などが殺到している。その目的はまだまだわれわれの意図するものから遠いが、この機会を大事にまた慎重に正しい情報を発信していきたいと考えている。「ツボは移動する」このことが伝われば、鍼灸医学の真の時代が到来するのではないだろうか。